

本郷新

「彫刻の美」を追い求めて



兄弟と。中央が本郷（大正6年）



わたつみのこえ除幕式（昭和28年）



泉の像制作中（昭和33年）



「老人の首」とともに（昭和12年）



小樽のアトリエにて（昭和41年）



さ
さんと陽光が降り注ぐ都会のオアシス、大通公園。芝生に腰を降ろし、

楽しいに語らう人々の傍らには、大空に向かって手をかざす三人のバレリーナの像が静かにたたずんでいる。この「泉の像」こそ、日本近代彫刻史に輝かしい足跡を残した札幌出身の彫刻家本郷新による代表作の一つである。

明治三十八年、北三条西二丁目に本郷は生まれた。父親は種苗や農具を扱う会社を経営しており、その農園が現在の宮の森一帯にあったことから、畑や果樹園が広がり、ウサギが野を駆ける素朴な自然環境の中で幼少期を過ごすことになる。

小学校四年生までは、絵の成績は特に良くなかったという。五年生の時に絵の好きな教育実習生に出会い、次第に描くことの喜びに目覚め始め、粘土細工にも関心を抱いていた。

画家である叔父の影響もあって、本格的に油絵に取り組み、芸術家への道を歩む決意を固めていったが、両親は強く反対した。その叔父が画業で稼ぐことを嫌い、親類に生活を頼っていたのが原因だった。

結局、工芸ならば生計を立てられ、美術にも無縁ではないと、辛うじて東京高等工芸学校工芸彫刻部（現千葉大学工学部）への入学を許されることになった。

上
京した本郷は、美術学校に学ぶ同輩に負けまいと、昼夜惜しまず勉強に励んだ。卒業前後には彫刻家である詩人の高村光太郎に師事し、ロダンなどフランス近代彫刻の作家に傾倒していく。

昭和三年、二十二歳の時に当時新設されたばかりの「国画創作協会」に出品し、鮮やかなデビューを果たすと、気鋭の作家として順調に認められていった。しかし、高い評価を得る一方で、本郷は美術界を支配する権威主義や、作品が一部の資産家や愛好家だけの手に渡ることに不満を覚え始めていった。ついに三十三歳の時、若い仲間たちと国画会

を飛び出し、革新的な創作活動を目指し始める。いわゆる大正デモクラシーの時期に古い価値観と体制に立ち向かい、自由を求める気概が満ちていたのだろう。

当
時の野外彫刻は、軍人や政治家など、個人をたたえる銅像がほとんどであった。本郷は、都市に美観を与え、多くの人々に愛される、公共性の高い記念像の制作を志向していた。しかし、戦時体制下では、その思いを実現することはできなかった。

